

亘理町町制施行70周年記念

第21回伊達開拓「ふるさと従兄弟（い〜とこ）」

まちづくりサミットinわたり

記録集



北海道伊達市章



宮城県亘理町章



伊達家家紋「竹に雀」



宮城県山元町章



宮城県紫田町章



福島県新地町章

日時：令和7年2月1日（土）午前10時35分開会

「ふるさと姉妹都市・歴史友好都市」連絡協議会

目 次

伊達開拓「ふるさと従兄弟（い～とこ）」 まちづくりサミット開催要領	2
次 第	3
対 談	4
サミット宣言	23
参考資料(協議会構成市町の紹介)	24

伊達開拓 「ふるさと従兄弟（い〜とこ）」まちづくりサミット 開催要領

1 趣 旨

伊達開拓にかかる亘理町、山元町、新地町、柴田町並びに伊達市の5市町「ふるさと従兄弟（い〜とこ）」は、東北の雄、仙台藩の家臣達であり、「海を渡った武士団」として歴史的なつながりを持っている。明治維新を迎え、逆賊の汚名をきせられた仙台藩亘理領主伊達邦成公は北海道開拓で理想郷建設を目指し、明治3年、自ら家臣とその家族を伴い、柴田家も含めた総勢 255 名を率いて有珠山のふもとに入植し、引き続き明治 14 年までに家中侍やその家族など 2,800 人余りが9回にわたり移住し、現在の伊達市の礎を築くこととなった。

こうした歴史的な絆をより確かなものとし、関係5市町等が、次代に継ぐべき文化遺産を生かしたまちづくりと交流によって相互の限りない発展を期するものである。

2 目 的

伊達開拓にかかる関係5市町が“ふるさと”の歴史と文化を正しく伝承し、郷土愛の醸成ならびに関係市町相互の親善交流を促進するため、それぞれの特色を生かしたまちづくりを話し合いながら歴史を学び未来を考えるためまちづくりサミットを開催し、地域の文化・経済の活性化を図る。

3 参加市町

北 海 道 伊 達 市
宮 城 県 亘 理 町
宮 城 県 山 元 町
宮 城 県 柴 田 町
福 島 県 新 地 町

4 主 催

「ふるさと姉妹都市・歴史友好都市」連絡協議会

5 開催期日

令和7年2月1日（土） 10時35分から12時05分まで

6 会 場

亘理町中央公民館 大ホール

（宮城県亘理郡亘理町字旧館61番地22）

次 第

1. 開 会

2. 構成市町紹介

各市町首長・議会議長紹介

3. 開 会 宣 言

協議会会長 亘理町長 山 田 周 伸

4. 対 談

テーマ 「歴史から紐解く次世代への遺産」

(1) 明治時代以降の苦難の歴史そして現在

(2) 東日本大震災のその後、郷土への想い

(3) 歴史観 「先祖の歴史から学ぶこと」

ゲスト 仙台伊達家18代御当主 伊達 泰宗 様

亘理伊達家20代御当主 伊達 元成 様

コーディネーター

奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊 伊達 成実 氏

< 休 憩 >

5. ディスカッション

新地町長 大堀 武

柴田町長 滝口 茂

伊達市長 堀井 敬太

山元町長 橋元 伸一

亘理町長 山田 周伸

6. サミット宣言

協議会会長 亘理町長 山 田 周 伸

7. 閉会のあいさつ

協議会副会長 伊達市長 堀 井 敬 太

8. 閉 会

～ 対 談 ～

ゲスト

仙台伊達家18代御当主 伊達 泰宗 様

【プロフィール】

昭和34年2月9日 東京生まれ
伊達家34世 仙台伊達家18代当主

【現職】

伊達家伯記念會(株)代表取締役、(公財)瑞鳳殿顧問 名誉資料館長
(公財)東北放送文化事業団理事、(学)聖ウルスラ学院名誉顧問
(一社)伊達家鳳文会総裁、仙台商工会議所顧問 他



テーマ「歴史から紐解く次世代への遺産」

ゲスト

亘理伊達家20代御当主 伊達 元成 様

【プロフィール】

昭和53年10月28日 北海道伊達市生まれ

亘理伊達家20代当主

【経歴】

北海道伊達市学芸員、第62次南極地域観測隊・越冬隊員
伊達市役所勤務



コーディネーター

奥州・仙台おもてなし集団

伊達武将隊 伊達 成実 氏

【プロフィール】

伊達の双壁・武の武将
政宗公の1歳年下の従兄弟。亘理伊達家初代領主。
人取橋の戦い、大坂の陣などに参戦。伊達家随一の猛将として
恐れられ、また、幾度となく政宗公の窮地を救った。
奥州・仙台おもてなし集団伊達武将隊は、仙台・宮城の魅力を
全世界に届けるため現代に蘇り、仙台城跡を拠点に活躍中。





《献香之儀》

亘理町町制施行70周年を記念し、仙台伊達家18代御当主 伊達泰宗様によりまず献香之儀が執り行われ、式典をお清めいただきました。なお、介添え役は、奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊 伊達成実氏にお務めいただきました。

《伊達成実一人語り》

生誕～家督相続

遡ること456年前、永禄11年、現在の福島県は大森城にて生を受けた。父は伊達実元、母は鏡清院。初代仙台藩藩主 伊達政宗様から見れば一つ年下、大叔父の子であり、従兄弟でもある。

政宗公が南奥羽の覇者となるまで

時は戦国。政宗様は齢18、儂は17で家督を継ぎ、共に数多の戦場を駆け抜けた。中でも忘れ難き戦は二つ。一つは仙道人取り橋、現在の福島県本宮市で佐竹・芦名連合軍と戦った合戦。伊達方が総崩れする中、儂は退却せずに敵を押し返した。

もう一つは、摺上原、福島県の磐梯山の麓で宿敵芦名と戦った合戦。風向きによって戦局が大きく変わり、芦名方を総崩れにし、見事勝利を呼び込んだ。

亘理統治

南奥羽の覇者となられた政宗様は、その後、豊臣秀吉、徳川家康の配下となる。

慶長5年には徳川に挙兵した上杉景勝を討つべく、白石城を攻めることと相成る。ここでの戦いぶりを認められ、儂は政宗様よりこの地亘理を拝領。今から422年前のことである。

儂は亘理に入るとすぐに、城の構築と城下づくりに取り掛かった。儂の霊場である大雄寺をはじめ、旧領地の伊達郡や信夫郡にあった神社や寺を移したり、町場を整備した。治水、用水、新田開発のほか鳥の海周辺には塩田も開き、石高は当初の3倍まで増やすことが叶った。

成実の功績と亘理伊達家の危機

時には藩政にも関わり、政宗様や2代忠宗様の名代として江戸に上ることもあった。

我が子孫の代においても、亘理伊達家の領地の完全継承が認められたことは嬉しきこと。長きにわたり、仙台藩のために尽くした甲斐があったというものじゃ。

時は流れ、15代当主 伊達邦成の時に亘理伊達家存続の危機が訪れた。皆もよく知る、明治初め戊辰戦争における仙台藩の敗北である。

仙台藩領は62万石から28万石に減らされ、亘理伊達家は2万3千石の領地を失った。代わりに仙台藩から130俵の米が支給されることとなったが、こればかりの米では、とても千人もの家臣とその家族を養うことはできず、仙台藩、亘理伊達家は窮地に立たされた。



《 演 武 》

剣武旋風・さんさ時雨

伊達武将隊いざ参らん！

毛虫の前立て、香車の陣羽織は、いかなる困難の前でも決して後ろには退かぬという我が不退転の決意である。伊達家のため、伊達政宗様が夢のため太刀を振るわん。儂が、政宗様が従兄弟にして、この地を治めし亘理伊達家初代領主 伊達成実である。

本日は、亘理町(まち)、荒浜町(まち)、吉田村、逢隈村の二町二村が合併し、現在の亘理町となりて、ちょうど70年の節目を迎える記念すべき日。このめでたき日と集いし方々との出会いを祝し、伊達の地に古くより伝わる祝い唄「さんさ時雨」にのせて、もてなしの舞をご披露つかまつる。

儂、成実は伊達家伝来の地、信夫郡は大森城にて生を受け、政宗様とともに幾多の戦場を戦ってまいった。人取橋の合戦、摺上原の戦い、大坂冬の陣、夏の陣。

1604年、この亘理の地を拝領、民とともに町の礎を築いた。されどこれは儂一人の力にあらず。今日まで代々この地を守り抜き、この亘理の地を支えた民の力に他ならぬ。成実にとって亘理の民こそ最大の宝である。

亘理町よ、これより先も、ともに前へ。

《伊達泰宗様、伊達元成様入場》

亘理町町制施行70周年おめでとうございます。奇しくも、今年は何と我ら伊達武将隊も結成して15周年に入る年でございます。さて、本題に戻ります。先ほどの演武の前にあった儂の語りでの歴史について、皆様聞いていただきましたかのう。その後の亘理町、伊達家の歴史の続きは、今の世に、伊達の名を受け継いでおられる仙台伊達家、そして亘理伊達家の両御当主のお二人から語って頂きたく存じます。

正面の後ろ大ホール入り口をご覧ください。

さすればお呼び申し上げます。仙台伊達家18代御当主 伊達泰宗様、亘理伊達家20代御当主 伊達元成殿、ご入場でございます。





対 談

テーマ「歴史から紐解く次世代への遺産」

ゲスト 仙台伊達家18代御当主 伊達泰宗様

巨理伊達家20代御当主 伊達元成様

コーディネーター

奥州・仙台おもてなし集団 伊達武将隊 伊達成実氏

【泰宗様】

ごきげんさまでございます。巨理伊達家ご当主と宗家として親しく語り合う機会を作っていただきました巨理町の皆様に心から感謝申し上げます。本日は宜しくお願い致します。

【成実氏】

さて、我が殿、仙台藩藩主 伊達政宗様のご子孫であられる仙台伊達家18代御当主 伊達泰宗様と儂成実の子孫でござる巨理伊達家20代御当主の伊達元成殿との顔合わせというのは、この70周年の記念式典に相応しい顔合わせかと存じます。皆様いかがですか。

では、会場の皆様にまずはご挨拶をいただければと存じます。始めに、仙台伊達家18代御当主 伊達泰宗様、宜しくお願い致します。



【成実氏】

続きまして、亘理伊達家20代御当主 伊達元成殿、宜しくお願ひ申し上げます。

【元成殿】

伊達市から参りました伊達元成でございます。本日は、お招きいただきまして誠にありがとうございます。町制施行70周年、この記念の日に私が講師でよかったと本当に心



から思っております。今日この日に、邦成公がもしこの席にいてこの姿を見ることができたなら、何ておっしゃるかなと考えておりましたが、やはりこの一言しかないかなと思います。「さすが亘理、あっぱれである」ときっとこういう風におっしゃったと思っております。今日は短い時間ではありますが、どうぞ宜しくお願ひ致します。

【成実氏】

では、早速お話をお聞かせいただきたいと存じます。まずは、先ほど成実が演武の冒頭で語った歴史についての続きの部分をお伝えさせていただきます。

亘理伊達家は、現在の亘理町、山元町の山

下、丸森町の一部、福島県新地町を領地としておったが、戊辰戦争の後、その全てを失うことと相成った。

亘理伊達家の家臣は、武士の身分を捨てて、新たな統治者となる南部家のもと農民として暮らすのか、武士のまま別の土地へ移住するかの決断を迫られた。ちょうどこのころ新政府では、北海道の開拓を計画。仙台藩に対して、幕末の蝦夷地警護の経験を踏まえて移住開拓に尽力するよう指令を出す。仙台藩では、これを好機ととらえて積極的に移住を推進。この亘理においては、15代当主の邦成が、家老の常盤新九郎、後の田村顕允の進言を聞き入れ、家臣とともに北海道へ移住して戊辰戦争で被った汚名をそそぎ、成実以来の名家亘理伊達家の名を残すことを決意。移住は明治3年から9回にわたって行われ、旧家臣のほかに柴田家臣団が加わることと相成った。

では、明治時代以降の歴史について、両御当主のお二方からもお話を頂戴いたしたく存じます。

始めに、泰宗様から戊辰戦争からの苦難の歴史から現在に至るまでの想いについてお聞かせいただければと思います。

(1) 明治時代以降の苦難の歴史そして現在

【泰宗様】

今から158年前の慶応4年、江戸時代の終焉を迎えた戊辰戦争がありました。この時、仙台藩は奥羽越列藩同盟軍の中核として、薩摩、長州を中心とした朝廷軍と戦いました。数では勝る幕府側でしたが、西洋式軍隊として訓練され、ガトリング砲をはじめとする最新式の圧倒的な火力の前に幕府軍は敗れ、伊達62万石は28万石へと減俸されます。先程、家臣団は領地を失い、新天地を求めたというお話がありました。宗家はどうかであったかということ、いわれなき賊軍と称され新政府



の命により国許仙台から東京に生活の拠点を移すことになり、父の代まで東京で生活をしていました。私は昭和34年、かつて江戸下屋敷が置かれた東京都港区麻布で生まれました。

まだ子供の頃、明治32年に生まれた15代当主邦宗の次女慶子が、幼いころの話を聞かせてくれました。冬「寒い」その一言を聞いた父邦宗は、「北海道で苦勞している旧臣達の事を思ったならば、そのような言葉は使えぬはずである。」と厳しく咎められたそうです。以来、宗家では「弱音吐くべからず」これは約束事となりました。

私が東京から仙台に戻るきっかけとなりましたのは、昭和20年7月の仙台大空襲で城下町の7割と共に焼失した仙台藩祖伊達政宗公の眠る御霊屋瑞鳳殿の再建に伴う墓所の発掘調査でした。昭和49年の事です。当時私は15歳、遺族として政宗公墓所発掘調査に立ち会いました。墓室の蓋石が開けられた時、中央には石灰が小山のような状態で残っていました。古文書には、江戸桜田上屋敷で亡くなった政宗公の御遺骸は円形座棺に安座した姿で納められ、周囲には防腐剤として石灰を詰めたとあり、そのままのお姿で、政宗公は埋葬されていました。調査員が刷毛を使い少しずつ石灰をよけていきました。沈黙と緊張の瞬間でした。目の前に政宗公の頭蓋骨が現れた時の驚きと感動は、生涯忘れる

ことはできません。「成人したならば必ず仙台に戻って参ります。そして、おそばで御公をお守りさせていただきます。」とお誓い申し上げました。その願いが叶って、東京国立文化財研究所研究員、宮内庁書陵部研究員を経て、再建された瑞鳳殿の資料館長として仙台に戻ってまいりました。そして、明治以降初めて仙台市民として住民票を取った伊達家最初の当主となりました。

【成実氏】

ありがとうございます。では、続きまして元成殿には、戊辰戦争後の北海道開拓について、また、元成殿ご自身の南極大陸観測隊としての知見を踏まえてお話しいただければと存じます。

【元成殿】

先ほど明治のお話ということで、片やこの東北に残った仙台の藩士の方々と北海道に渡った我々の祖先の開拓団の話がありましたけれども、亘理伊達家に二つの大きなミッション、使命がありました。一つは仙台藩の汚名をそそぐこと、それから、もう一つは亘理の家臣たちの生活を守ること。この二つをですね、同時にいい方向に持って行くためには、どうしたらいいかということで、当時理の家老の常盤新九郎がですね、新政府が何考えているのか、徹底的にリサーチして、何を政府が求めているのかということ突き止めて、そして、北海道開拓というところに目をつけて実行していくわけです。物の本にもよりますが、住み慣れた仙台藩の土地を離れて、北海道開拓という大変苦勞をしたということは間違いのないわけですが、そういった出来事は、様々な書物にも書かれています。「失意のもと北海道に渡った。北海道の地に着いてもポロポロと涙を流す女性がたくさんいた」と記述書にもたくさん残っています。そういうところからみても、



非常に大きな決断をして辛い思いだったんだろうなというふうに思っていたんです。でも、「いや違うかもしれないな」と、一つ経験としてあったのが、南極に行ったことだったんです。

私、第62次南極地域観測隊ということで、おそらく仙台藩主の中で初めて南極に行った者じゃないかと勝手に思っているのですが、どういうことがあったのかというと、コロナの時代だったので、南極観極船「しらせ」で南極へ向かう途中、通常は、オーストラリアとかに寄ったりするのですが、コロナのため、直接南極へノンストップで行くこととなりました。

「しらせ」には、食糧ですとか燃料とかたくさん積んで南極へ向かいます。まさに明治3年に寒風沢港を出港したことと同じようなシチュエーションだったわけで、その時、私、楽しいといえますか、ワクワクしたんです。「何がこれから起きるんだろう。」と。それは、本とか読んでいれば、これから起きることはある程度分かっていましたが、何ていうでしょう、ちょっとこう今まで住み慣れた社会から離れていくという高揚感というのは、おそらく先祖もあったんじゃないかなど思っているんです。明治になって北海道に渡ってもですね、イケイケのことをしている。例えばですね、北海道に移住した後、街を作っていきますが、ある人はですね、「蒸気船を作って海運業に進出したい。」と。移住直後の

ことですよ。それはちょっと早すぎるということで、それはやめなさいとなったわけですが、先進的なことをどんどんやろうとしている。これ本当に、失意のどん底の中で、まちづくりをするというのは、相当大変なことだとは思いますが。モチベーションが違うところに軸がいていたのではないかと。それは、先を見越す力と先祖代々の家風といえますか、毛虫の前立が「前に前に」といわれているように、これを支えたのではないかなと思うわけです。

【成実氏】

ありがとうございます。戊辰戦争後の北海道移住という苦難の歴史を踏まえてお二方の想いを語っていただきました。貴重なお話で聞き入ってしまいました。

それでは続きまして、東日本大震災のその後、そして、郷土への想いについてお二方にお話をいただければと存じます。

これまでの歴史の中で、様々な苦難を経験してまいりましたが、現代に生きる我らもまた未曾有の苦難に襲われてござる。中でも、ふるさと姉妹都市・歴史友好都市連絡協議会が発足した平成3年以降では、平成12年3月の有珠山噴火をはじめ、平成23年3月1日には、宮城県沖を震源とする東日本大震災が発災するなど度重なる被害を被ったところでござる。

泰宗様、東日本大震災の発災時というのは、どのような状況でございましたか。

(2) 東日本大震災のその後、郷土への想い

【泰宗様】

3月11日は仙台にいました。長く強い地震の揺れがおさまり、窓の外を見た時、目の前の仙台城廓の石垣が全て崩れていました。すぐにも駆けつけなければと思ったのは瑞鳳殿でした。道路も寸断され車も使えない



ため、小雪の舞う中を走っていきました。幸い瑞鳳殿本殿は無事でしたが、廟域の石垣や灯籠は全て倒壊し崩れていました。伊達家の墓所は、瑞鳳殿の他に歴代公の墓所が県内外に置かれています。父の墓は大年寺山伊達家歴代墓所にあり、山全体が墓域となっています。大年寺山伊達家歴代墓所には、数百基の灯籠が置かれていましたが、そのすべてが倒壊し足の踏み場もないほどの惨状でした。伊達家に仕えた者達の墓石も全て倒れ、重さ4トンもある伊達家当主と夫人の墓石も位置がずれていました。

伊達家の歴史は政宗公仙台入府から更に400年遡ることが出来ます。伊達家発祥の地である福島県伊達地方の墓所被害状況の調査も大変でした。伊達地方は果物の産地として知られていますが、道すがら収穫されぬままの果物を目にしました。猫の子一匹いない景色でした。墓所に着いた時、この地域を一人残って守っているお年寄りと役場の方が待っていてくれました。東電原発事故による高レベルの放射線量は、新聞で知っていましたので覚悟してはおりましたが、「正確な数値は知らない方がいいです。」と、ひとこと言われました。この墓所の他にも改葬工事を含め伊達家関係遺跡を全て修復するには3年を要しました。12月24日、この日は、慶長5年政宗公が青葉山にて仙台城下町の縄張り初めを行った仙台の誕生日です。私は毎年暁の時刻青葉山に登り、仙台の安寧を願

い政宗公騎馬像と共にこの日を祝います。例えば、2011年12月24日震災の年に、青葉山から見た景色は、海がとても近くに感じました。仙台中心部に向かって黒い土だけが残った大津波の後。かつて遠く海岸線にあった松林は櫛の歯が折れたように数本が残るのみでした。これまで見たこともないような景色を政宗公も1611年慶長の大地震と大津波の後、同じように目にされたのだらうと思いました。まさに400年後、18代目当主である私が政宗公と同じ景色を見るとは、思いもよりませんでした。政宗公騎馬像に向かう途中、いたるところで、地割れや石垣が崩れ、立ち入り禁止のロープが張られていましたが、かまわず天守台を目指しました。政宗公騎馬像はいつものように、遙か太平洋そして城下を望んでいました。私は、走って台座に抱き着きました。政宗公が見守ってくれる。きっと仙台は再生する。そう思いました。

【成実氏】

泰宗様ありがとうございます。

では、元成殿からは、被災したこの巨理に訪れたその時の想いを聞かせていただければと思います。



【元成殿】

私はあの地震があった時には、市役所に勤めていまして、すぐに支援物資とかをかき集めて、巨理の方へ車で運ぶための手伝いを行

っておりました。被災直後には、私はこちらの方には入ることはできなかつたんですけれども、半年ぐらいして少し落ち着いたところに、巨理に入らせていただきました。もちろん墓所の大雄寺の墓石は全て倒れた状態でありまして、それまで、倒れたという情報は電話でいただいていたんですけれども、「墓所はいいと。とりあえず人命の方を優先して欲しい。」というひとことだけ伝えて、電話を切ったということは覚えております。その後、どうやって町を再建していくためのお手伝いができるのかなと一生懸命考えましたね。財政的な支援はできませんが、歴史的な経緯ですとか記憶、そういったものから町の歴史をもう一度探り出していくというお手伝いができたらということを考えておりまして、何回かその後、こちらの巨理町でお手伝いさせていただきました。

【成実氏】

ありがとうございます。

それぞれの立場と状況で感じたこと、お考えになられたことについてお話いただきました。続きまして、お二方の郷土に対する想いをお聞かせいただければと存じます。それでは、泰宗様、宜しくお願い致します。

【泰宗様】

郷土という言葉は、その人の立ち位置によって変わってくるように思います。例えば、外国にいれば郷土は日本となるように。我が家の家訓の中に次の言葉があります。「祖先を崇拝する事は、国民生活の上に於いて最も必要な条件の一つで有ると思う。吾々が今日、この地位にあるという事は、これ一つに祖先の努力の賜物である。若し、吾に祖先なかりせば、今日の地位は得られなかつた人間は何時如何なる時に於いても、歴史を没却して現在ありとは考えられない。過去に於いて祖先は、我々の現在を産まんが為には血と肉と心

とを捧げ奮闘したのである。其の子孫たる我々は其の努力を想わねばならぬではないか」すなわち我が国、いいかえるならば我が郷土があるということは、ご先祖様が血と肉と心を捧げ、どのような想いで次の時代へと託していったのか、その事への感謝を忘れてはならないと思います。そして私たちがどのようにして、その想いを次の時代へ伝えていくか。郷土への想いというのは、こういうことなのではないでしょうか。

【成実氏】

ありがとうございます。では続きまして、元成殿お願い致します。

【元成殿】

私はまだ40代ですけれども、日頃の生活の中で、近頃お家が絶えていく様子をまざまざと見る。そのお家が後継ぎの方がいらっしゃらなくて絶えてしまう。多分全国的なこと





なのでしょうけれども。それを誰かが支える、受け継いでいく、バトンをつなぐ人たちがいたほうがいいわけです。例えば、我々の先祖は、巨理から北海道に移った時にですね、墓守ということで、お墓を守ってくれる人に、例えば、荒さんのお家だったり、太細さんのお家だったり、片平さんのお家だったり、墓守をお任せして残ってもらうということがありました。今の時代は、そういうようなことがありませんが、延々と家を繋いできた経緯があります。この経緯に敬意を払う。経緯を知って敬意を払うということを少しずつ理解できるようにお手伝いできたらいいなあと思います。自分のお家を、まあ地域もそうですけれども、愛する。愛って言葉はなかなか恥ずかしいのですけども、自分の町とか、地域とか、そこにつながっている人を愛すること。愛したりできる社会、そういう風土っていうのは、消えていくものも誰かに継がれていくし、絶えるものも守られていくし、そしてそれを糧として、我々は新しいものを作っていく立場なので、何もかも真っ新な状態で立ち上げるんじゃなくて、そういう基盤を守りながら次のステージを作っていくっていうことをどうしたらいいのか、守りつつ考えながら進んでいきたいと思っています。

【成実氏】

ありがとうございます。

さてここまで、明治時代以降の苦難の歴史、

そして、現在、さらには、東日本大震災のその後、郷土への想いについてをお話いただきました。それでは最後になりますが、先祖の歴史から学ぶことと題しまして、現御当主であるからこそ語ることができる、伝えねばならない、伝えていきたいという言葉について、お二方からそれぞれお考えを会場の皆様に向けてお願いできればと存じます。泰宗様、宜しくお願い致します。

(3) 歴史観「先祖の歴史から学ぶこと」

【泰宗様】

歴史といえますと、過去の出来事、自分とは関わりのない事、そう割り切って考える方もあるかと思います。考え方もかもしれないのですが、もしも、私自身が80年前に生きていたら、どうだったのか。終戦を前に、帰ることのない明日の出撃を待っていたかもしれません。歴史の中に自らを置いてみた時、歴史というのは身近で現実的なものとして感じるように私は思います。もう38年前になりますがNHK大河ドラマ『独眼竜政宗』の監修をしました。おかげさまで最高の視聴率をいただきました。番組の主人公の子孫が監修者。これはNHK大河ドラマ始まって以来だそうです。当時は電話帳に名前が出ていました。番組が終わると視聴者から電話がかかって来ることもありました。例えば「梵天丸も斯くありたい」このシーンに感激したとか。一方で「伊達家を守るためには、自ら父兄弟の命を奪うのか」「800人撫で斬りを命じるような残酷な先祖を持って、どのような気持ちで監修しているのか」こういった意見も監修者として受け止めました。しかし武家にとって、御家存続は何にも代えがたい論理であり、現代社会における倫理観とはかけ隔たるものです。父輝宗公の壮絶な最後は伊達家の名誉を守り、弟小次郎君の成敗は家中分裂の危機を回避しました。政宗公が籠城する人



質を前にして、撫で斬りを命じていなければ、戦は膠着状態となり「若き伊達家の当主、器量それまで」と狡猾な周辺の大名から背後を突かれ、ここで政宗公が討ち死にしていたならば、私は、現在存在しないのです。戦国時代に「独眼竜」の異名を天下に轟かせたからこそ、後に仙台藩祖としての道が拓かれた。すなわち、この瞬間があるのです。私は歴史から学ぶという事は、未来の自分を知る事なのかもしれない。そう思っています。

【成実氏】

泰宗様、「未来の自分を知る」というところについて、もう少し詳しくお話しいただければと存じます。

【泰宗様】

先程紹介した家訓は、こう続きます。「現在を思い将来を慮るに、過去の歴史に発奮するものは、必ず勝利者である。歴史は斯くの如く、事実を証明しているのである。」今から100年前も400年前も人間の行為は、あまり変わっていないように思います。たまたま日本は80年間平和を享受しておりますが、世界では未だに領土主権をめぐる戦争や紛争が続いています。これは人間の歴史として避けられないものなのかもしれません。けれども、たとえ困難に直面し道が閉ざされようとも、そして、時には遠回りしようとも、自分の羅針盤を固く信じ、心はいつも平らかにし

て、先祖より受け継いだ国造の想いを忘れることなく、一人ひとりが、確実にやれる事に向かって全能力を尽くしたならば、必ず道は拓かれると信じます。これが政宗公の生き様から教えられた私の心の持ちようです。歴史から学ぶということは、もう一度歴史を見つめ直す。自分は子孫として未来のために何をしなければならぬのか、すなわち、未来の自分を知る事になるのだらうと思います。

【成実氏】

泰宗様、ありがとうございます。

それでは、続きまして元成殿、宜しくお願い致します。

【元成殿】

私も同じことを考えておりましたし、同じ経験をしまして、独眼竜政宗の終わった直後、放送中ですね、電話かかってきまして、「お宅の伊達さんと何か関係あんの？」そういう方がいらっしゃったなと思い出しましたし、ああ同じ経験をされていたんだなあと思いました。

私も同じ歴史から学ぶことと未来を見据えることというのは、私はですね、過去を見つめることができる距離を持った人がその同じ距離を先読みできる。400年前を見つめることができる人は、400年先を見つめることができる。どこまで古い過去までフォーカスが効くかどうかという力は、すなわち未来を見通す力なんだと。70年前を見通す人は70年後をクリアできる。経緯がわかると、これから未来に何かをするといった時、それが間違っているか合っているかっていう判断をするとき、過去の記録を見れば、失敗した事例があったとき、それは確かに法整備とかシステムとか、現代とは違うものがありますが、筋を通したり、倫理観とか価値観とかそういう普遍的な人間の感情みたいなものを把握するには、過去の経緯を見て、未

来を見通す大きな力を持つべきじゃないかなと思うわけです。私の先祖も、強力な武力を持っていた存在ですので、大きな力を持ったり、大きなものを背負った人は、それだけの責任を負いますから、我々は、非常に大きな組織、仙台藩という組織をどういう風を守るかというために決断したその先に、戦があったり、まちづくりがあったりしますが、その時に先祖はどうだったか、苦勞した経験が道しるべとして、迷わぬ灯台として、未来を照らしていくということが大事なことでないかなと思います。

過去から学ぶことがあるということが、未来を創るためには、不要なものではなく、おしる未来を示すための標を探すための大事なプロセスであると思います。

【成実氏】

ありがとうございます。今、泰宗様と元成殿の話聞いて思いましたけれども、政宗公は、千代に八千代に永久に繁榮する都という

願いを込めて「仙台」と名付けられたことを考えると、政宗公もまた、さらに先祖を遡ってこれから先のさらに永久に繁榮する都に向けての先見の目というか、時代を見通す力をお持ちだったのかなとすごく感銘を受けました。

泰宗様、元成殿、苦難の歴史や先祖の歴史から学ぶ様々なお話、現御当主であるからこそ語ることができる、伝えなければならない言葉など、大変貴重な機会をありがとうございました。会場の皆様、町制施行70周年の記念として、対談をしていただいた伊達泰宗様、元成殿のお二方に大きな拍手をお願い致します。

それでは、対談についてはこちらで一度幕を引かせていただきますが、その後は、今の対談を踏まえて、各構成市町の首長の皆様にご質問の時間とさせていただければと存じます。準備しますので5分ほどそのままお待ちくださいませ。宜しくお願い致します。





【司会】

休憩時間ではありますが、皆様ステージの緞帳にご注目ください。この緞帳のデザインは、小野潭(ふかし)さんが描かれた「第1回移住者室蘭に上陸」をモチーフにしています。小野潭(ふかし)さんは、第3回移住者の子として、明治9年1876年、現在の伊達市弄月町(ろうげつちょう)で生まれました。独学で日本画や彫刻を学ばれ、巨理伊達家とその家臣たちの開拓の様子を後世に残そうという強い想いから、移住開拓の絵を数多く描いております。改めて緞帳をご覧ください。よく見るとアイヌ衣装を身に着けた人が舟を岸に着けるのを手伝ってくれたり、疲労のためなのか、歩けなくなった人を背負って運んでくれたりしているのがわかります。当時、浜辺には棧橋がなく、波打ち際は氷が張り付いていて、舟が着けられなかったところを、現地のアイヌの人々が上陸に手を貸してくれたそうです。この緞帳から、アイヌの人々が移住者にたくさん親切にしてくれことが伝わってきます。

緞帳のモチーフ以外の開拓画は伊達開拓歴史画 小野潭(ふかし)遺作集『樹海を拓く』に収められています。興味がわいた方は、巨理町図書館の郷土資料コーナーにございますので、是非ご覧ください。

それでは、再開まで今しばらくお待ちください。





ディスカッション

新地町長 大堀 武
 柴田町長 滝口 茂
 伊達市長 堀井 敬太
 山元町長 橋元 伸一
 巨理町長 山田 周伸

【成実氏】

さて皆様、準備が整いました。これからは、先ほどの対談を踏まえて、構成市町の首長より感想やご質問などを伺いたく存じます。ですが、市長の皆様、町長の皆様ですね、結構時間が押してるということでございまして、少し手短にと申しましょうか、簡潔にお話いただければと思います。申し訳ございません。成実の顔に免じて許してください。

それでは始めに、新地町大堀町長お願い致します。

【新地町長】

仙台伊達家18代御当主様、そして、巨理伊達家20代御当主様、それぞれのお話いただいて、ご先祖の話を聞きながら、非常に感激をしているところでありますが、それに対

する質問は、私の今の知識の中では出てこないということでございます。そんな中で、当新地町では、戊辰戦争の話は少しぐらいしか触れなかったんですが、実は、仙台藩含めて伊達藩の最前線が当新地町であります。そんな中で、この奥羽列藩同盟を仙台藩が構成して「会津のため」というようなことで、一生懸命戦いをさせていただいたわけですが、当新地町に宮城県から来ていた松山隊全員がお亡くなりになったというところで、あとは、駒ヶ嶺城址にそういった碑がいっぱいある地でもあります。そういった中で、非常に痛ましい戦争ではありましたが、いろいろな想いの中で、それぞれ頑張ったんだろうという風に思っております。

また仙台藩は、非常に子どもたちの教育を含めて一生懸命だったようであります。福島の会津もそうでしたが、藩校があります。仙台藩の藩校、養賢堂の教授だった方、氏家閑存(晋)さんという方ですが、当時学制ができる前に、当新地町に小学校を開校して、その教授になっていただいたということございます。そして、そこには、仙台藩の13代藩主の勅命ということで、楽山公ということで入った扁額があります「観海堂」という名前を付していただいて、それが新地町にありま



す。町ではそれを大切に保管しながら、教育の方では頑張っています。また、それに伴っているいろいろなお寺もあります。虎嘯山(こしょうざん)龍昌寺とか、そういった所もあります。

北海道の開拓に進まれたこの巨理伊達家、当新地町からもかなりの先祖が行っているわけですが、北海道伊達市とは、昭和57年にふるさと姉妹都市を締結していただいて、巨理伊達家の14代当主伊達邦成公愛用の品々を実は伊達市から頂いて、当町でそれを大切に保管しながら伊達一族としての絆を今もしっかりと持っていることであります。そういった中で、非常に感謝をしておりますので、今後も良いお付き合いをお願いしたいと思います。また、「巨理伊達開拓図」ということで、伊達市の方に住まわれていた方だと思わんですが、小野潭(ふかし)さんという方の水墨画も寄贈いただいて、これも大切に保管をしながら新地町も伊達家の一族として福島県ではありますが、頑張っていきたいと思っておりますので、今後とも宜しくお願い致します。

【成実氏】

質問ではなく、感想をいただきました。ありがとうございます。

さすれば続いて、柴田町の滝口町長お願い致します。

【柴田町長】

柴田町は、伊達家に付いていった柴田家でございます。お二人のお話を聞いてましてですね、郷土や先人たちへの想いの大切さというのを伺ったんですが、実は現実を見ると、郷土から人がいなくなっている。地域から人がいなくなっているというような問題を抱えておりますし、先人たちへの想いということだとですね、「墓じまい」ということで、過去と切り離そうという動きの方が強くなっているのではないかなど、そのへんお二人はどう思われているのかなど。日本がですね、何も拠り所がなくて崩れかかっていると私の危機感でございます。で、一方ではですね、若い人達が一部の流れですけれども田園回帰という流れがありますし、シビックプライドというものを求める。何故なのかと感じますと、やはり社会が不安定で、不安なので、自分を包んでくれるもの、人と人との繋がっている歴史のある郷土というものを求めているんだらうなという風に思っております。ですからこういう一方相反する流れをですね、これからのまちづくりにどう生かしていくかというのが今日の感想になっております。それで、じゃあどうしていこうかといった時に、伊達家の家訓ですね、「弱音を吐かない」ということでございますので、これがまず一つ。それから巨理伊達はですね、伊達家の開拓というところでですね、「辛い思いをした」それしか今まで頭になかったもんですから、当主の方から「それもあつたけれども、新天地っていう高揚感があつたんだ」というお話がありましたので、正に弱音を吐かない、それから新天地への高揚感ということになりますと伊達家に付いて行った柴田家も、まあそれを私今運営させていただいているんですが、ありがたいなという風に思っているところでござります。もし、お答えできるのであれば、先ほどいった流れ、日本のマイナスの流れのご感想をいただければと思います。



【成実氏】

今のお話に対して、泰宗様お願い致します。

【泰宗様】

私、初めに「ごきげんさまでございます」というご挨拶をいたしました。聞きなれない言葉かもしれません。これは伊達家に伝わる武家の礼法、『仙台藩作法』でかわす挨拶です。「ごきげんさまでございます」素敵な言葉だと思いませんか。是非、今日から皆さん「ごきげんさまでございます」と挨拶を交わしてはいかがでしょう。何事も挨拶から始まるのです。一番小さな国の単位というのは、親子兄弟から始まります。原点が整っていなければ、学校でもうまくいきません。家族、学校、地域社会は其々独立したものではありません。人と人との間を円満な形へと繋げていく。これが礼法の基本です。『仙台藩作法』は、現在、仙台市内にある聖ウルスラ学院英智高等学校で必修科目として実施されており、私も特別授業を年2回、受け持っております。この学校は、戦後女子教育のため、祖母が伊達伯爵邸と土地すべてを修道会に寄付し創立され、当初は『伊達女学院』と呼ばれました。手前味噌ですが、現在は関東以北偏差値が一番高い私立学校となりました。礼法を学ぶことによって学力も飛躍的に向上しました。何事も先ずは挨拶から始まる。両親に感謝兄

弟仲良く、ここから国造りは始まるのではないのでしょうか。

【成実氏】

ありがとうございました。柴田町長いかがですか。

【柴田町長】

それをもってですね、柴田の領国支配について、ああ支配じゃないな。町政運営をやりたいと思います。ありがとうございました。

【成実氏】

では、続きまして、質問に移らせていただきます。伊達市堀井市長、宜しくお願い致します。

【伊達市長】

伊達市長の堀井でございます。まずは、仙台伊達家18代御当主様、また、巨理伊達家20代御当主様、本当に貴重なお話ありがとうございました。精神的な面、当時のお気持ち、おそらく先人たちがこういう気持ちだったんだろうということも含めて、時代背景をお聞きすることによって、私今まで表面上しか分からなかったことも、本当にずっと入ってきたなというところがありました。本当にありがとうございました。

精神的なところでいうと、過去から頂いた感謝をしながら未来に繋いでいくということが大事なのかなと話を聞いていて思ったのですけれども、今それこそ北海道の伊達市においても、成実公が着ている勝色である藍ですね。藍の文化も実はまだ根付いていて、若い方がその藍を新たに染め物をしたり、藍を使って様々発信をしたり、実は私の中学校の後輩なんですけれども、取り組んだとかですね、そういう過去のものに敬意を払いながら未来に繋いでいくってということも残って



いるので、本当に亘理伊達家の皆さんの気持ちってというのが今も伊達市に根付いているんじゃないかなということ強く思ったところなんです。

様々な困難があって、困難のたびに伊達家がどんどん困難を乗り越えて、今があるということを考えて、本当に今の伊達市の最大の困難は、少子化・人口減少であります。今、伊達市は、年間300から400人口が減ってしまっていて、今もう3万2千人を切って、年少人口ですね15歳未満の人口が9パーセントしかいません。高齢化率が40パーセントに迫るところまで来ております。ただ、そうした困難も、今お二人のお話を聞いて、乗り越えられるんじゃないかという気持ちが出てまいりました。これまで伊達家の皆さんが、数々の困難を乗り越えてきたベースがある町ですので、今、最大の困難である少子化・人口減少というところも前向きに是非打開策を少しずつ考えながら、市民の皆さんとともに、市政を進めてまいりたいということに改めて思った次第です。感想ですけども、ありがとうございます。

【成実氏】

堀井様ありがとうございます。では続きまして山元町の橋元町長お願い致します。

【山元町長】

山元町長の橋元でございます。お二人の当

主の方本当にありがとうございました。歴史書では知れないような、内々の話をお聞かせいただきました。

山元町としては、私としてはですね、今日お話をさせていただきたいのは、伊達家の方に関連があるといいますか、山元町に、あの皆さん今日来ている方ご存じの方もいると思うんですが、伊達家ゆかりの茶室がありません。震災もありまして、朽ち果てる寸前までいった茶室でございますが、無事に修復を終えることができまして、昨年11月に一般公開を始めることができました。これについてはですね、クラウドファンディングということで皆さんからご寄付をいただいたりもしたんですが、伊達という名前の中で、皆さんもすぐ思い浮かぶと思うんですが、サンドイッチマンの伊達さんですね、伊達家にはつながりがあるということで、最初寄付をスタートしたときは、ちょっと苦しいスタートになりましたが、町の方としては一切お願いとかしていなかったのですが、伊達さんですね、出演しているラジオの中でそのことを取り上げていただきまして、数日後にはテレビでもちょっと取り上げていただきまして、そしたら、たったたちまちの間に寄付がドンと集まりまして、今回スムーズに修復作業が進んだところであります。その茶室を通じて、今日はその茶室に関してということではないですが、坂元地区というところに茶室があるんですけども、今日はですね、最後まで伊藤副知事にも残っていただいておりますけれども、副知事もちょっとですね坂元地区に関係があるということで、今後いろいろとご相談したいと思いますが、宜しく願い致します。

私からはですね、御当主も茶室についてはご存じだとは思いますが、江戸時代末期以降では、たった一つ、唯一残された伊達家ゆかりの茶室ということで、私たち伺っております。その伊達家茶室のことについて、当主



の方からですね私たちの知らない部分とい
いますか、何かちょっとでもその内容の話が、
もし分かっていることがあればちょっとお
聞かせいただければと思うんですが。

【成実氏】

では、泰宗様、宜しくお願ひ致します。

【泰宗様】

『伊達』と冠が付くと、牛タンも伊達家に
関係しているように思われることがありま
す。時には「私は政宗公の子孫です」と名乗
る方が訪ねてくる事もあります。さて、ご質
問の茶室について、私は詳しくありません。
お話にありました伊達みきおさんの始祖は、
今から600年前南北朝時代に活躍した9
世政宗公の弟伊達宗行で、伊達家一家である
大條氏の子孫になります。明治時代に宗家か
ら伊達姓を許され現在に至ります。デビュー
当時に伊達政宗公の子孫と紹介された事で
誤解を招き、ご本人から「宗家にご迷惑をか
けてしまい申し訳ございません」とお詫びに
来られました。伊達みきおさんも歴史を大切
に思い郷土のために力を尽くされている方
ですので、これからも力になってくれると思
います。

【山元町長】

ありがとうございました。

【成実氏】

ありがとうございました。では、しんがり
でございます。亘理町山田町長、宜しくお願
ひ致します。

【亘理町長】

本日は本当に、仙台伊達家18代御当主の
伊達泰宗様、そして、亘理伊達家20代御当
主の両御当主、本当にありがとうございました。
そして、このような形で亘理の地にお二
人揃って来ていただいたことに、大変心から
感謝を申し上げます。本当にありがとうござ
いました。

私もいろいろとお聞きしたいことがある
んですが、時間の都合がありますので、私か



らは両御当主のお二人、そして成実様にも御
礼して、私からのご挨拶といたしまして、い
ろいろお聞きしたいということは無しにさ
せていただきたいと思ひます。最後に私の方
で、またサミット宣言をさせていただきます
ので、宜しくお願ひ致します。

【成実氏】

ありがとうございます。

さすれば、刻限と相成りましたゆえ、此度
の軍議はこの辺とさせて頂きます。泰宗様、
元成殿はじめ構成市町の首長の皆様、貴重な
お話お時間を誠にありがとうございました。
会場の皆様方、大きな拍手をお願ひ致します。

さて、あっという間のお時間でした。ごさいました。が、此度のサミットはいかがでしたかな。

泰宗様、元成殿の力強いお言葉やお考えは成実にもとても深く刺さりまして、有意義な時間に相成りました。参加された皆様にとっても、人生に響くような有意義な時間となったと思います。最後にひとつ儂から皆様にお願いがございします。本日このサミットで様々な感想と想いといろいろと出たと思いますが、それを是非お帰りになった後、いろんな方々にお話してください。「こういったことがあったよ。こういう想いを聞いてきたよ」と。地域の歴史というものは、全て人がどんどん後世に語り継ぐことによってはじめて輝いてゆくものだと儂は思っております。このサミットの経験をこれから後世に宝として伝えて参りたいと存じますゆえ、何卒、宜しくお願ひ致します。

さすれば、これにて対談はお開きといたします。最後まで、ご参加いただき、誠にありがとうございました。





伊達開拓ふるさと従兄弟まちづくりサミット宣言

伊達開拓ふるさと従兄弟関係5市町は、歴史的な絆をより確固たるものとし、先人の英知と努力によって築かれた文化遺産を後世に伝えながら、ふるさと姉妹都市・歴史友好都市として、産業・教育・文化・まちづくりの相互交流を積極的に推進することにより、限りない躍進と発展を目指すことをここに宣言する。

令和7年2月1日

ふるさと姉妹都市・歴史友好都市連絡協議会

福島県 新地町



町章は新地の「しん」の字を図案化したもので、新地町が太平洋をのぞみ、前途洋々たる姿を表し、円形は町民の融和と団結を、円形から鳥が飛び立つ姿は、町の産業文化の発展を示し、新地町が大海に向かって大きくはばたくことを象徴したものです。



新地町長 大堀 武



新地町議会議長 遠藤 満

世帯数	2,922世帯
人口	7,445人
面積	46.53km ²

令和6年12月31日現在

新地町（福島県）

（しんちまち）

町制施行 昭和46年8月1日

町役場 〒979-2792

新地町谷地小屋字樋掛田 30

【町の概要】

新地町は福島県浜通りの最北端に位置し、北と西は宮城県、南は相馬市、東は太平洋に面した自然環境が豊かで、四季を通じて温和な気候に恵まれています。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の地震と津波により、多くの家屋が被災し、町の面積の約2割が浸水しました。震災からの復興に取り組み、住まいの再建、海岸堤防、防災緑地などの整備とあわせて、復興の基盤として交通ネットワークや産業基盤が整備されました。重要港湾相馬港の新地町分では、天然ガス（LNG）の受入れ基地が完成し、それを活用した天然ガス発電所が運転を開始され、産業振興に期待が高まっています。

令和3年8月には、町制施行50年、令和6年8月には、3村（福田村・新地村・駒ヶ嶺村）合併70年を迎えました。

本町は、比較的小さな町域ながら、海・里・山の豊かな自然を背景に、「安心して暮らせる 活力あるまち しんち」をめざし、まちづくりに取り組んでいます。

【旧地名】

新地村・福田村・駒ヶ嶺村

昭和29年8月20日3村合併により新地村誕生

昭和46年8月1日町制施行により新地町となる。

【町名のいわれ】

開拓地であることから新しい土地、新地となる。

【「町の花」や「木」「鳥」などのシンボル】

花 さくら（昭和53年7月制定）

木 松（昭和53年7月制定）

鳥 きじ（平成5年3月制定）

魚 かれい（平成5年3月制定）

【めざす将来像・キャッチフレーズ】

安心して暮らせる 活力あるまち しんち
【自慢の風景】

鹿狼山から望む太平洋の初日の出

（「日本一早い山開き」鹿狼山元旦登山）



【自慢の施設】

釣師防災緑地公園（パンプトラック、オートキャンプサイト、BBQサイト、ドックラン）



【特産・おみやげ】

○純米吟醸酒「鹿狼山」

○りんご（りんごジュース 果汁100%）

○ニラ

○イチジク

（いちじく愛す・新地ゃんの味菜たれ等）

○トマト

○青南蛮味噌・ネギ南蛮味噌

○コシヒカリ・天のつぶ

○タコシウマイ

○新地のおすそわけ

（新地町の美味しい特産品を詰め込んだセット）



宮城県 しばたまち 柴田町



柴田の2字を図案化したもので柴田町の興隆を象徴しています。この町章は、昭和36年12月20日町民から募集した作品をもとに制定しました。力強く飛翔する柴田町をデザインしたものです。



柴田町長 滝口 茂



柴田町議会議長 高橋 たい子

世帯数	16,365世帯
人口	36,331人
面積	54.03km ²

令和6年12月31日現在

柴田町（宮城県）

（しばたまち）

町制施行 昭和31年4月1日

町役所 〒989-1692

柴田町船岡中央二丁目3番45号

代表番号 ☎0224-55-2111

交通機関・最寄り駅 JR東北本線船岡駅

花のまちイメージキャラクター



【町の概要】

仙台市から南へ25kmに位置し、町の東南端を阿武隈川、中央部を白石川が流れ、町を二分している。国道4号線、JR東北本線、阿武隈急行線などが走る交通要衝の地の利を生かし、企業誘致を進めた結果、食品関連や精密機器関連などの大手企業が進出し、事務所を構えている。

白石川堤の一目千本桜、船岡城址公園は全国有数の桜の名所である。その他、多くの遺跡にも恵まれている。

【旧地名】

昭和31年4月1日に船岡町と槻木町が合併し、柴田町になる。

【「町の花」や「木」「鳥」などのシンボル】

昭和50年10月10日制定

花 さくら 春になると船岡城址公園や白石川堤に淡紅色の可憐な花を咲かせる「さくら」。町もさくらのように、末代まで親しみ愛されるようにと制定。

木 もみの木 大河ドラマ「縦ノ木は残った」の放映で町民にとってもなじみのある「もみの木」。町も、もみの木のように、大空に向かって一直線に伸びるようにと制定。

鳥 きじ 母性愛が強く、美しい姿が柴田町を象徴しているような「きじ」。町も、きじのように、いつまでも美しく慈しまれるようにと制定。

【キャッチフレーズ】

「笑顔があふれ 誇りと愛着を育む 花のまち」

【観光資源】

白石川千桜公園



【自慢の施設】

柴田町総合体育館



【参考図書】

柴田町史（柴田町発行）

北海道 伊達市



「桜」は土族によって開拓せられたことから武士の精神を象徴したものであり、「川」は清い川が多く旧地名「モンベツ」「オサルベツ」などの「ベツ」はアイヌ語の「清い川」の意であるので場所を表わしたものである。「円」は開拓当時の苦労は文字通り全く千辛万苦そのものであって主従を共苦同愛の境に追い込み相より相扶け成功せしめたので「円満」を示したものである。
(昭和 11 年5月1日制定)



伊達市長 堀井 敬太



伊達市議会議長 辻浦 義浩

世帯数	17,380世帯
人口	31,208人
面積	444.2km ²

令和6年12月31日現在

伊達市（北海道）

（だてし）

市制施行 昭和47年4月1日

市役所（本庁舎）〒052-0024

伊達市鹿島町20番地1

代表番号 ☎0142-23-3331

交通機関・最寄り駅 JR室蘭本線 伊達紋別駅



市の木「エゾヤマザクラ」

【市の概要】

北海道の南西部、北海道の中心都市である札幌市と函館市の間に位置し、北西には有珠山や昭和新山、南は噴火湾（内浦湾）に面しています。

病院、大型ショッピングセンター、福祉施設などの生活に必要な施設がまちなかに集約された「コンパクトシティ」で、北海道内でも雪が少なく、四季を通じて気候が温暖なことから「北の湘南」と呼ばれています。

平成18年3月には旧大滝村（現大滝区）と飛び地合併し、新伊達市として新たなスタートを切りました。

平成31年には伊達市開拓150年、令和4年には市制施行50年を迎えました。

【旧地名】

明治33年7月、東紋鼈・西紋鼈・稀府・黄金薬・長流・有珠の6ヶ村を併せて伊達村と改称した。

【市名の謂れ】

明治3年4月、旧仙台藩一門の巨理伊達家主従の集団移住により開拓が始まったことに由来する。

【「市の木」、「市の花」】

木…「エゾヤマザクラ」、「ヤマモミジ」

花…「ツツジ」、「ミヤマエンレイソウ」

（理由）昭和53年4月、市民から公募して制定。

いずれも日常的に市民に親しまれている。

なお、「ヤマモミジ」「ミヤマエンレイソウ」は、旧大滝村のシンボルであったものを、合併時に加えたものである。

【まちの将来像】

みんなが豊かさを感じられる
市民幸福度最高のまち

【特産品・名産品】

- ①噴火湾のホタテ
- ②マツカワ（ブランドネーム「王蝶」）
- ③キンキのいずし
- ④昆布のぐいのみ
- ⑤黄金豚…三元豚にホエーを給餌することで肉質がやわらかくジューシーな伊達のブランド豚
- ⑥伊達トマト「藤五郎」
- ⑦大滝産長いも
- ⑧伊達野菜（道内有数の野菜産地）
- ⑨アロニア加工品…ポリフェノールを多く含んだ果実
- ⑩各種キノコ
- ⑪藍の染料・藍染の製品
- ⑫伊達納豆
- ⑬地酒



世界遺産北黄金貝塚の竪穴住居

やまもとちょう
宮城県 山元町



山元の2字を図案化し、全体の円は町民の団結、融和、協力を表し、仙台湾にあって将来仙台圏の衛星都市として限りなく発展する山元町の、力強く回転する歯車を象徴している。中心より上の部分は躍進する若々しい芽生えを意味している。



山元町長 橋元 伸一



山元町議会議長 菊地 康彦

世帯数	4,879世帯
人口	11,430人
面積	64.58km ²

令和6年12月31日現在

山元町（宮城県）

（やまもとちょう）

町制施行 昭和 30 年 2 月 1 日

町役場 〒989-2292

山元町浅生原字作田山32番地

代表番号 ☎0223-37-1111

交通機関・最寄り駅 JR常磐線 山下駅

【町の概要】

宮城県の東南端に位置し、西には阿武隈山地、東は太平洋に面し、温暖な気候風土と緑豊かな自然に囲まれた、山から海まで地域資源が豊富な町である。

基幹産業は農業で、いちごをはじめとした施設園芸に加え、沿岸部では、大区画化された農地での水稲作付やサツマイモ・ネギなどの土地利用型作物作付が盛んに行われている。

春は「いちご狩り」、夏には沿岸部に数百万本のヒマワリが咲き誇る「ひまわり祭り」、秋には「ぶどう狩り」、冬には光の祭典「コダナリエ」と、四季折々の町の風物詩が楽しめる。

【旧地名】

山下村・坂元村

昭和30年2月1日合併し町制を施行

【町名のいわれ】

旧山下村・坂元村両村合併の際に、山下村の「山」と坂元村の「元」を生かし、山元町が誕生した。

【「町の花」や「木」「鳥」などのシンボル】

花：ツツジ（昭和60年11月制定）

木：黒松（町制施行20周年記念事業として、町民から募集。昭和50年11月、最も多かった黒松を制定）

鳥：ツバメ（昭和60年11月制定）

【キャッチフレーズ】

キラリやまもと！

みんなでつくる笑顔あふれるまち

【特産品】

- ① いちご シーズンには完熟いちごをその場で味わえるいちご狩りのほか、産地ならではのスイーツやワインなど、さまざまな加工品がある。
- ② りんご ほとんど市場に出回らない希少品

で、主力品種のふじは、蜜入りのジュシーな味わいが好評を得ている。

- ③ ホッキ貝 町内産は、ふっくらと肉厚で甘みが強いのが特徴である。
- ④ ショイマスカット 一粒一粒が果汁たっぷり、食べ応えのある秋の味覚を代表する果物である。
- ⑤ 復興芝生 沿岸部農地の再生を後押しするため、東日本大震災後に栽培が始まった芝生。ラグビーワールドカップの会場にもなった豊田スタジアムにも使用されている。

【郷土料理】

ほっきめし

ホッキ貝の身を煮汁でご飯を炊き、その上にホッキ貝の身をのせたご飯。



【キャラクター】

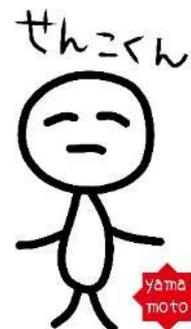
- ・ホッキーくん

ホッキ貝をモチーフにデザインされたキャラクターで、役職は山元町PR担当係長。町の魅力を発信するために活動している。



- ・せんこくん

合戦原遺跡で発見された飛鳥時代頃の横穴墓の壁面に描かれていた「線刻壁画」のモチーフをもとにデザインされたキャラクター。山元町の歴史PR係として活躍中。



宮城県 わたりちょう 巨理町



巨理の「ワ」を図案化したもので、簡潔、ざん新、かつ堂々とした形は、融和、堅実性と未来への発展を表現している。



巨理町長 山田 周伸



巨理町議会議長 安藤 美重子

世帯数	13,481世帯
人口	32,825人
面積	73.60km ²

令和6年12月31日現在

亶理町（宮城県）

（わたりちょう）

町制施行 昭和 30 年 2 月 1 日

町役場 〒989-2393

亶理町字悠里 1 番地

代表番号 ☎0223-34-1111

交通機関・最寄り駅 JR常磐線 亶理駅

【町の概要】

宮城県の南東部に位置し、政令指定都市仙台市から JR 常磐線で約 30 分の地にある。

北に阿武隈川が流れ、自然景観が織りなす海、山、川など天性の風土に恵まれ、冬暖かく夏涼しい気候温暖な住みよいまちである。

基幹産業は農業で、温暖な気候と都市近郊の立地条件を活かしたいちごや施設野菜、りんご、アセロラ栽培が行われている。

また、荒浜漁港には大型のカレイやヒラメ等が水揚げされ、東京・名古屋に高級活魚として直送されている。

【旧地名】

旧亶理町・荒浜町・吉田村・逢隈村の 2 町 2 村が昭和 30 年 2 月 1 日に合併し、現亶理町が誕生した。

【町名のいわれ】

「わたり」は、元来大和言葉であり、古くから川や海を渡る所を称した。表記の漢字は異なるがこの地名は、日本の各地に残っている。

亶理という地名は、延暦 16 年（797 年）完成の「続日本紀」に初めて文献として登場する。

これによると養老 2 年（718 年）5 月 2 日の条に日理くわたりと記されていて、この日理が現在の亶理であるといわれている。

【「町の花」や「町の木」】

花 サザンカ

理由 中秋から冬にかけて咲き、その力強く咲く姿は、大きく発展する亶理の姿を象徴している。

木 黒松

理由 庭木や防潮林としてだれにでも親しまれている。

【キャラクター】



わたりん



ゆうりん

【キャッチフレーズ】

「山と川、里と海を人と時代(時の流れ)でつなぐまち」

「ずっと亶理、未来にわたり（70 周年記念）」

【特産品】

- ①いちご 年間通して気候が温暖な亶理町はいちご栽培に適した地域であり「東北一のいちご生産地」として知られ、町内ではいちご狩りも楽しめる。
- ②りんご 亶理産のりんごは、市場には出回らないことから幻のりんごとされ、完熟で濃厚な味わいが好評である。
- ③アセロラ 1994 年に亶理町の伊藤正雄さんが、アセロラの苗木を植え、現在は、東日本唯一の生産地として全国に届けられている。

【郷土料理】

はらこめし

産卵のため、阿武隈川に帰って来たサケを捕獲しサケの切り身を煮込んだ汁で味付けしたごはんの上に、サケの切り身と卵（はらこ）をのせた料理。

「10 月 8 日は、はらこめしの日」



